

敬愛する友 松本三郎君を偲ぶ

松本三郎さんと私はほぼ同じ時期に慶應義塾に教員として採用され、ともに同じ研究室棟で多くの時間を過ごしていたにもかかわらず、学部が異なり専攻分野もかけ離れていたため一九八一年に時の塾長石川忠雄先生からともに常任理事の大役を仰せつかるまでは、親しく言葉を交わすようなことはほとんどなかった。もちろん松本さんについては、アジア地域の研究者として優れた成果をあげられているだけでなく学内の重要な役職も見事にこなす逸材という評判が高かったので、彼に対してはそれなりの関心は持っていた。それで、廊下ですれ違ったエレベータに乗り合わせたときなどそれとなく彼を観察させてもらったが、それによると松本さんは同じ逸材でも切れ味鋭い刃物のような冷たい感じではなく、人間味豊かな温かい感じの逸材のように思われた。というのは、松本さんは身長一八〇cmを超す立派な体格の持ち主なのに彼には人を威圧する感じがまったくなく、いつも

明るくにこやかなその風貌からはむしろ人に安心感を与えるような不思議なオーラが発せられているような感じさえしたからである。そんなことがあったせいなのか、ほとんど言葉を交わすこともなかったのに私は松本さんに年来の友に対するような親近感をもつようになっていた。

それだけに一九八一年に常任理事として松本さんと一緒に仕事ができるようになったときには大変嬉しく感じたものである。ところが、実際にその職について仕事をしてみると嬉しいどころではなく苦勞の連続であった。そんな時私を救ってくれたのは、あの松本さんの笑顔と平常心を忘れない彼の仕事ぶりであった。生来無器用な私は慣れない仕事をすると変に気張って肩に力が入り過ぎる嫌いがあり、それが災いして常任理事就任当初は仕事がスムーズに運ばず苦勞したが、彼の笑顔がそれを癒してくれたし、これまでと変わらない態度で難しい問題を手際よく処理している彼の仕事ぶりは、私に余計な力を抜くように教えてくれた。私が四年の任期を無事勤め上げることができたのは松本さんのお陰といって過言ではない。どんなときにも平常心を失わない彼の心の強さは「以誠交者 終生不悔」という処世訓から培われ

たものであろう。たしかに誠意をもって事に当たってればその成否は問題ではなくなるはずで、そういう悟りの境地に達したら必然的に余計な力は入らなくなるし、いつも平常心で事に当たれるようになるだろう。松本さんがどんなときにも平常心でいられるのは彼がすでに悟りの境地に達していることの表れであって、そうした彼の精神が最も遺憾なく発揮されたのは、一九八三年五月に日吉記念館で行われた義塾創立一二五年記念式典で彼が司会の大役を果たしたときである。式典は昨年一月の創立一五〇年記念式典に較べればかなり簡素なものであったが、それでも国内外から多数の来賓を迎えての式典であったから、そこで司会をするとなれば緊張して当然なのに、松本さんは普段と少しも変わらぬ口調と態度で見事にその大役を果たされたのである。

こういう松本さんと一緒に仕事ができただけは私にとっては大変な幸せで、彼への感謝の念は尽きることがない。

名誉教授 田村 茂

五十年のお付き合い

——松本三郎さんを偲んで

松本さんのお付き合いはちょうど五十年に及んだ。一九五九年四月、大学院の修士課程に進学し、英修道教授のご指導を受けることになったとき、松本さんは博士課程に在学中であった。

初対面の時、その立派な体格とメガネの奥のやさしそうな目が印象的だった。英先生のご専門分野の東洋外交史のうち、私は日本外交史を継承し、松本さんは法学部政治学科が地域研究を充実しようと設置した東南アジア論を専攻されることになった。以後英門下の兄弟弟子として、英ゼミの学生の面倒を見たり、合宿に参加したり、学会ではじめて報告することになった際、予行演習の場を設定して内容とともに決められた報告時間を守るようにと時計片手にチェックしていただいたこともあった。英先生にご注意を受け落ち込んでいるとき慰めたり、励ましたりしていただいたこと、母が亡くなったとき、留学先から長い手紙を頂戴し「君のお母さんのことをいろ

いる考えて昨夜は寝られなかった」と書いてきてくださったこと、新婚間もないお宅に英ゼミの学生と押し掛け食い荒らしたこと……思い出すことばかりだ。

理事長を務めた日本国際政治学会、アジア政経学会など学会で活躍されると同時に、松本さんを語る際に外せないのが、学校行政とのかかりである。慶應義塾志木高校の校長として赴任された際は、さまざまな問題を温和な態度で処理され、どんと構えたその姿から「とど校長」と呼ばれ、教員と職員の信頼を集めていたと聞いた。

志木高の校長につづいて欠かせないのは、石川忠雄塾長のもとで務めた常任理事としての役割である。マレーシア滞在中、石川塾長から国際電話で理事就任を要請され、留学を途中で打ち切って帰国、慶應義塾創立一二五年の記念行事に専心され、募金、藤沢キャンパスの充実、記念式典の開催などに尽力された。石川塾長の信頼がいかに厚かったかは、その後三期にわたって理事として石川体制を支えたことに示されている。その間、文部省関係の中教審、大学審、設置審などに参加、私大連にも深く関係し、大学行政に通暁していった。そこで培った教育行政のノウハウは、防衛大学校校長として従来理科系

であった同校の社会科学系を強化する折に發揮された。

防大校長を退職後、同大教官の研究費確保のため防大 学術振興会会長として資金集めに奔走、さらに学術財団 日本安全保障・危機管理学会会長として、防大や我が国の 安全保障のための活動を惜しまなかった。引退後、英ゼミOB諸君の誘いでよく旅行にご一緒した。いつも陸子夫人を同伴され、箱根、伊豆、軽井沢といった国内はおろかオーストラリアまで足を延ばした。

平均寿命が八十歳をこえるようになった今日、七十七歳は早すぎる旅立ちである。アルバムを改めて見てみる。大柄なため皆のなかでひととき目立ち、ニコニコしている松本さんの姿がある。写真から「池井君」という宇和島なまりのあの声が聞こえてくる。

教育者、研究者さらに学校行政の面でも手腕を發揮され、ご家族にも恵まれ充実した生涯であった。

ご冥福を祈りたい。

名誉教授 池 井 優

松本三郎さんの想い出

人の呼び方は出会いの時によって決まる。私が松本三郎さんに初めて接したのは、私が大学院の学生で、松本さんが法学部助手の時であった。松本さんはすでに東南アジアの政治、中国の東南アジア外交の研究を志す新鋭の研究者であり、その人柄故にまた中国政治の研究を始めたばかりの私にとって、最も親しくしていただいた先輩の一人であった。それ以来、松本三郎氏は尊敬と親しみをこめて、私にとって「松本さん」であった。

松本さんの多くの著作のなかで私の印象に最も残っているのは、やはり『中国外交と東南アジア』（慶應通信、一九七一年）である。当時の学界でこの研究テーマを追求する人の数も少なく、それ自体が新鮮であった。それは、東南アジアの政治に通じていると同時に、よく中国外交研究の成果をとりいれ、東南アジア諸国と中国との外交・国際関係を分析した優れた学術的著作であった。

松本さんの学術活動で忘れてならないのは、「三田ア

セアン研究会」である。その起源は、松本さんが香港総領事館に滞在していた時知り合ったジャーナリストなどが中心に集まった研究会であった。その後私のような大学関係者も参加し、毎月一回研究報告を行い、時には外部から講師を招くこともあった。この研究会が二五〇回も続いたのである。月一回の会合であるから、二五年存続したことになる。私は必ずしも常時出席したわけではないが、忙しい松本さんはほとんど出席されていた。研究会の主要な話題はアジアに関するものであり、私はそこで多くのことを学んだ。それと同時に私は、この研究会において慶應以外の多くの研究者・ジャーナリストと知り合うことができた。それは後の私の学会活動に大いに役立つものとなり、その意味で私は松本さんの重要な「遺産」の一部を引き継がせていただいたと思っている。研究会が終わった後の三田の居酒屋での会合は研究会と同じくらい楽しかった。この研究会が存続できたのは、全く松本さんの学識と人柄によるものである。私は、この面で今でも松本さんに感謝している。

私を学会の仕事に導いて下さったのも松本さんのお陰である。われわれは若い時からアジア政経学会の会員で

あった。中年に至り松本さんが学会の理事長に推され、その時総務担当理事として私は松本さんを補佐することになった。学会の理事の間では出身大学や年齢の上下による区別はあまりないし、みな結構個性的である。それをどうまとめていくのか、そう簡単な仕事ではない。学会の事業のためにどのようにしてお金を集めるのか。そして、何よりもみなを励まし学術活動のための良い雰囲気を作り出すのか。松本さんのもとで私は学会の運営についていろいろなことを学んだ。その経験は、後年私が同学会の理事長を引き受けた時に大いに役立った。

松本さんは若い時からアメリカ、香港、東南アジア諸国へ長期の留学をされた経験がある。一九八一年に石川忠雄先生が二期目の塾長に推薦されたとき、松本さんは東南アジアに留学中であった。この時松本さんは留学途中で石川先生に「呼び戻され」、常任理事に就任することになった。そのことは松本さんにとって驚きであり、不本意であったかもしれない。以後松本さんは石川塾長のもとで一二年間常任理事を務められた。常任理事退任後、理事就任の時のいきさつを思い、一二年間の労をねぎらうつもりでふと私が声をかけると、松本さんは「そ

れはそれでいいんだよ」というような答えが返ってきた。彼には現実を柔軟に受け入れ、それを踏まえて自分の人生を切り開いていく態度が備わっていた。松本さんはそういう人であった。

私は常任理事時代の松本さんのすべての仕事を見ていくわけではない。その間に一緒に仕事をしたのは、藤沢に新しい二学部を作るための準備委員会においてであった。石川塾長のもとで松本さんがこの委員会のまとめ役であった。この委員会では実に活発な議論が行われたが、それは逆の面からみればみなが勝手にいろいろな意見を述べ合っただけのことである。したがって、みな意見をまとめるのはそう簡単なことではない。その結果、不満と批判は委員会のまとめ役の松本さんにかかってくることになる。松本さんは多様な意見を忍耐強く受けとめ、藤沢の二学部創設案をまとめられた。松本さんの努力と忍耐なくしてこの計画は実現しなかったと私は思っている。

近年松本さんにお会いする機会が二回あった。一度は石川先生をお宅と一緒に見舞った時のことである。そこで松本さんは前立腺癌を患っていることを告白された。

でも、今の治療を続けければ天寿を全うできますよと言っておられた。その時の縦容たる大人の態度に感服した。

いま一度は、池井優さんを交えて三人で二〇〇七年一月一五日に交詢社で食事をした時のことである。その時は特別の会合ではなく、旧交を温め、日常生活について語り、また会いましょうということでした。これが最後の松本さんとの会合になってしまった。その後何回もお見舞いの手紙を出したが、遂にお会いすることができなかった。

以上、脈絡もなく松本さんとの想い出話を書いてきた。温かい、大きな松本さんと共に過ごした日々が今でも私の心のなかに良き想い出として残っている。

名誉教授 山 田 辰 雄

東南アジア国際関係という同時代性 ——松本三郎先生の学問的営為

いまから半世紀前の一九五五年、松本三郎先生は慶應義塾大学大学院修士課程に進学し、日本外交研究の大家である英修道先生に師事なさった。修士課程では中東の国際政治を研究対象としたが、博士課程に進まれるとその関心はインド、中国、そして東南アジアというように、次第に日本に近づいてきた。そして、松本先生は日本における東南アジア国際関係研究および ASEAN (東南アジア諸国連合) 研究の開拓者となった。

そもそも松本先生が学問を志されたころ、東南アジア研究はアメリカで産声をあげはじめたばかりであった。当時の東南アジア研究は地域研究と称され、各国理解に重きが置かれていた。国際関係や外交研究への関心は極端に低かった。それには理由があった。一九五〇年代半ばから六〇年代といえ、国際政治は東西冷戦構造に翻弄されはじめるころであった。アメリカ型冷戦思考は地域研究の志向性を規定した。そんななか他方で、植民地

から独立したばかりのアジア・アフリカ諸国は中立路線を模索し、その動向は後に第三世界という言葉として定着した。

こうした世界情勢と学問世界の動向に、松本先生は敏感に反応なさった。松本先生が終生の研究対象として選択されたのは脱植民地化を図りつつあった東南アジアであり、そのなかでも研究蓄積の乏しかった外交・国際関係であった。松本先生の分析手法は、地域研究的な現場主義でありながら、国際政治学には融合的なものであった。ご自身の作品で理論的議論を展開なさることはなかったが、国際構造が国家の行動を規定すると考えるリアリズム論と、国家の相互作用の結果として構造が形成されるとみるリベラリズム論という、当時の国際政治学を代表するアプローチを巧みに組み合わせたものであった。その絶妙さは松本先生の東南アジア国際関係研究に遺憾なく発揮された。

松本先生の研究は、現実の東南アジア国際関係の動向をバランスよく、冷静に判断することから生まれた。東南アジアの国際関係は、国際冷戦の影響下における米中ソ日という域外大国との関係、数次にわたるインドシナ

戦争という冷戦の熱戦化に象徴される域内冷戦という構造、域内国際関係の磁場としてのASEANの形成・展開というように変遷を遂げてきた。日本と東南アジアとの関係も戦後新たに組み替えられ、不可分の関係性へ発展するにいたった。松本先生の研究の軌跡を振り返ると、まさに東南アジアを取り巻く同時代的な現象に敏感に触手を伸ばし、的確に分析した作品が連なっている。

元来、松本先生にとって学問的営為と教育とは密接に関連していた。国際冷戦が終焉した九〇年代以降、松本先生は大学行政に忙殺された。そうした状況下（であったからこそ）、松本先生は「アジアの歴史の胎動」について言及されることが多くなった。それはアジア（とその一員である日本）の胎動が世界的な影響力を有するとの予見であった。「アジアの歴史の胎動」があるからこそ、松本先生は「未来からの留学生」という言葉も好んで使われた。この言葉には学問的な裏付けをもった教育思想が凝縮している。松本先生の学者・教育者としての夢と実践、それは日本とアジアの未来を担う次世代のリーダー育成であった。

法学部教授 山本 信人

研究者の可能性と限界を 教えられて

松本三郎先生にお目にかかったのは、慶應義塾大学院の修士課程に入学したときでした。そして、博士課程に進学して松本先生のもとで研究を続けさせていただき、研究者の道を歩む機会を得ることができました。さらに、在フィリピン日本大使館にて外務省専門調査員として調査研究と外交の現場を経験することが、先生の推薦を得て実現しました。研究者としての私が今いるのは、こうした過程の結果なのです。私にとっての松本先生は、恩師という表現がぴったりします。

私が院生になったころ、先生は、慶應義塾大学の特徴となっていた地域研究の牽引者的役割を担い、東南アジアの国別研究、ASEANのような地域全体を視野に入れ、同地域への米国や中国の関与などの研究をなさっていました。また、埼玉県志木にある慶應義塾志木高校の校長をなさっており、若者の教育を真剣に考えていたのだと思います。研究と教育の両方で活躍しているときに、

東南アジアのことをほとんど勉強したことがないまま大学院試験で及第点にどうにか達した私を、先生は修士課程の学生として引き受けてくれたのです。恐らく、若者には可能性がある、と考えてくくださったのだと思います。

七〇年代後半は、二つのオイルショックに挟まれて景気が大きく後退する一方で、日本の企業や資本そのものが海外へ展開しようとするときでした。大学院での入試では、確か一〇人の定員のところに多くの受験生が集まってきたように記憶しています。日本外交、国連、朝鮮半島、日本政治、選挙などに関心をいだけた新入生のなかで、東南アジア研究を志したのは私一人だけでした。いつもと変わらぬ優しい態度で先生が接してくれたお陰で、自由に研究の方向を定めることができました。今思うと、勉強するうちに自分で自身の可能性の限界ぐらいいは気づくだろう、と考えていらしたのかもしれない。

先生のクラスの初日に、修士課程の一年目には多くの分野を勉強することになるが、厭わずに挑戦していきなさい、という趣旨のことを話していました。本をたくさん読んで目が充血するぐらいは何でもない、と。政治学の分野をまんべんなく勉強することが、将来の幅広い専

門性を獲得する素地となるのだ、と強調していました。残念ながら、私の目が赤くなることはありませんでした。先生が話していたことと同様なことを、大学院の新入生に話しています。

今の私は、大学院で指導をいただいた頃の先生の年齢とほぼ重なるようになりました。研究としてはおもに日米関係や安全保障を取り上げ、大学院にて博士号をめざす学生をも指導しています。そんな中、研究能力の基礎と思考の柔軟性を欠く学生にも出会います。当時の自分を見るようで、私自身、大学院に不向きの人だったとしか思えません。若者の可能性にかける教員の眼差しの大切さを、松本先生に教えていただいたようです。今ようやく、そのことに気づくようになりました。可能性とその限界を私自身が知るようになるまで、先生の予想を超えて時間がかかったのだと思います。

琉球大学教授 我部政明

松本三郎先生に師事して

松本三郎先生が初めて塾の常任理事に就任された年に、私は修士課程の大学院生として先生の下で勉強を始めた。それ以来約三十年間、先生が研究、教育、学校行政の三本柱にそれぞれ卓抜した能力と無類のバランス感覚をもって取り組まれ、確固たる実績を刻んでいく姿を比較的間近で拝見することができた。後に自らも大学教員となったが、振り返ってみると、先生から直接に薫陶を受けた研究面の他にも、傍らで見聞きしてきた先生の考え方やスタイルの多くを意識、無意識のうちに取り入れ、それらをほとんど唯一のお手本としてなぞってきた自分に気づく。

特に、松本先生のゼミに院生のチューターとして参加していた六年間に、先生のゼミ生に対する接し方を通して学んだものは多い。先生は常に学生を多面的に捉え、それぞれの持ち味や強みを引き出そうとされた。ゼミ生個々について、勉強面はもとより、課外活動や学外での

活動にまで関心を払い、時には家族や友人との関係にまで気を配りながら、それぞれの特徴を的確に評価し、アドバイスを与えておられた。夏のゼミ合宿では、勉強の時間とともに最終日のスポーツ大会とその夜の演芸大会が必ずセットで組まれていたが、それも学生が三種類の異なる場面どこかで活躍の場を見いだせるようにとの配慮だったように思える。個性を生かせる機会を与え、それを包み込むように見守り、そしてどんな持ち味をも前向きに評価する。そんなスタイルが先生の人の育て方だった。松本先生の葬儀の列に並んだ数多くのゼミ卒業生ひとりひとりの顔に、そのような先生への感謝の気持ちが表れているように見えた。

私自身、松本先生への多くの感謝のひとつとして、忘れ得ぬ思い出がある。博士課程を終えてマレーシアに留学していたときのある夏、先生が長女の亜津世さんを伴って回国を訪問されたことがあった。常任理事に就任する直前の数カ月を過ごされた思い出の場所を訪れたり、評判の良いレストランを巡ったりする楽しい旅だったが、現地でお迎える私にとっては寸分の手違いも許されない緊張の連続だった。知人から大型の乗用車を借り、三

日間フルにお供をした。そして最終日、最後の役目としてアレンジした夕食も先生に満足していただき、あとは空港へのお見送りを残すばかりとなった。その安堵感から一気にながらんでいたのであろう、不覚にも駐車場からの出がけに運転していた車を他車にぶつけてしまった。

出発時間が迫るなか、先生に待機していただき、汗だくで事後処理の交渉を済ませて何とか帰国便には間に合ったが、私としては最後の最後で先生に多大なご迷惑をおかけしてしまった恐縮さで意気消沈していた。別れ際に先生は、「いろいろ世話になったね、とても楽しかったよ、ありがとう」と私を元気づけるかのように明るく握手してください、余った小銭だからといって現地の小額紙幣を一握り手渡してください。お二人を見送って帰宅したあと、いただいた紙幣の束を改めて開いてみると、目につく外側を包んだ小額の紙幣の内側に、二台の車を修理しても余りある金額の高額紙幣が何枚も織り込まれていた。

松本先生のお仕事ぶりや生き方を同じようにたどることなど、私にはできようはずもない。ただ、こんなとき松本先生ならどうされただろう、という問いかけは私の

中で一生続きそうである。師としての松本先生はいつまでも心の中にいてくださる。

獨協大学教授 金子芳樹

松本三郎先生 略歴

- 一九三一年一〇月四日
岡部寅市、スエノの三男として、台湾台北市に出生
- 一九三八年四月
台北市旭小学校入学
- 一九三九年六月
両親とともに中国広東市に移り、日本人小学校に転入学
- 一九四二年九月
両親と別れ、二人の兄と東京に移り、滝野川第一国民学校に転入学
- 一九四四年四月
東京都立第五中学校に入学
- 一九四五年三月
三月一〇日の大空襲で戦災を受け、父の郷里愛媛県宇和島市に疎開、愛媛県立宇和島中学校に転入学
- 一九五〇年三月
愛媛県立宇和島高等学校を卒業
- 一九五〇年四月
東京大学（理科二類）に入学
- 一九五二年四月
東京大学教養学部教養学科国際関係論科に進学
- 一九五四年三月
同大学同学部卒業
- 一九五五年四月
慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程入学（英修道教授に師事）
- 一九五六年一二月
伯母松本キクと養子縁組
- 一九五七年四月
慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程進学（一九六三年三月修了）
- 一九六一年三月
星野睦子と結婚（一男二女を儲く）

- 一九六一年 四月
一九六二年 四月
一九六五年 四月
一九六五年 八月～一九六七年 八月
一九六七年 四月
一九六七年 一〇月
一九六八年 四月
一九六九年 一〇月～一九七〇年 三月
一九七二年 四月
一九七二年 九月～一九七三年 九月
一九七三年 四月
一九七三年 一〇月～一九七六年 九月
一九七五年 九月
一九七七年 四月～一九八〇年 九月
一九七八年 六月～一九八〇年 九月
一九八〇年 二月～一九八一年 六月
一九八一年 六月～一九九三年 五月
一九九三年 六月
一九九三年 九月
一九九三年 一〇月～二〇〇〇年 三月
- 慶應義塾大学 副手 (法学部)
慶應義塾大学 助手 (法学部)
慶應義塾大学 専任講師 (法学部)
米国ボストンのフレッチャー国際関係大学院に留学
慶應義塾大学 助教授 (法学部)
体育会ゴルフ部部长 就任
「現代東南アジア論」を担当、松本三郎研究会の発足
兼 大学通信教育部 学生部部长
慶應義塾大学 教授 (法学部)
在香港日本国総領事館特別研究員として出張
兼 大学法学研究科 委員
兼 大学学生部部长
法学博士 (学位論文「中国の東南アジアに対する政策―その理論と実践」)
兼 志木高等学校 校長
兼 理事
国際交流基金の派遣によりマレーシアのマラヤ大学に留学
常任理事兼 大学教授 (法学部) (この間、一九九〇年一月一日～同年四月一日まで塾長代理)
慶應義塾大学 教授 (法学部)
慶應義塾大学 退職
防衛大学 校長 (この間、一九九三年一〇月～一九九七年三月まで慶應義塾

大学客員教授（法学部）
慶應義塾大学名誉教授
勲二等瑞宝章受勲
逝去

一九九七年 四月
二〇〇二年 五月
二〇〇九年 三月五日

学会活動・社会的活動

（財）日本国際政治学会理事
同理事長
（財）アジア政経学会理事
同理事長
（財）国際法学会評議員
国際開発学会理事
第一四期日本学術会議第二部政治学会員
大学基準協会理事代理
大学設置・学校法人審議会委員
私立大学連盟常務理事
同副会長
大学入試センター運営委員
第一四期中央教育審議会委員
大学審議会特別委員
教育職員養成審議会委員

一九七〇年一月～一九九六年一月
一九九〇年一月～一九九二年一月
一九七三年～一九九七年
一九八五年一月～一九八七年一月
一九七一年一月～二〇〇二年九月
一九九〇年四月～二〇〇二年三月
一九八八年七月～一九九一年七月
一九八五年九月～一九九三年九月
一九八七年七月～一九九五年五月
一九八八年一月～一九九三年九月
一九九三年二月～同年九月
一九八八年一月～一九九四年三月
一九八九年四月～一九九二年四月
一九九一年一月～一九九三年九月
一九九一年一月～一九九三年一月

一九八三年二月～二〇〇八年三月
一九八九年三月～一九九五年二月
二〇〇〇年六月～二〇〇九年三月
二〇〇六年一月～二〇〇九年三月

(財) 三和国际基金評議員

(財) 旭硝子奨学会評議員

防衛大学校学術・教育振興会会長

日本安全保障・危機管理学会会長

松本三郎先生 主要業績

一、著書・編著

- 『中国外交と東南アジア』 慶應通信 一九七一年
『中国外交とインドシナ三国―その回顧と展望』 調書・外務省アジア局南東アジア第一課 一九七四年
『東南アジアの展望（共著）』 カルチャー出版社 一九七五年
『東南アジアの展望（共著）』 勁草書房 一九八〇年
『テキストブック国際政治（共編）』 有斐閣 一九八一年
『新版』東南アジアの展望（共編） 勁草書房 一九八六年
『新版』テキストブック国際政治（共編） 有斐閣 一九九〇年
『東南アジアにおける中国のイメージと影響力（共編）』 大修館書店 一九九一年
『ベトナムと北朝鮮―岐路に立つ二つの国（共編）』 大修館書店 一九九五年

二、論文

- 「国連における中国代表権問題」 外務省国際協力局第一課（編）国連研究資料 七巻二号 一九五八年
「アラブ・ナショナリズムの史的発展」 アジア研究 五巻三号 一九五九年
「ソ連の中近東政策―イランに対するソ連外交」 国際政治 一二号 一九六〇年
「ネール外交の矛盾」 （月刊）国連 四二巻二号 一九六二年

- 「インドにおける権力移譲への一過程 (一)」 法学研究 三五卷六号 一九六二年
- 「インドにおける権力移譲への一過程 (二・完)」 法学研究 三五卷七号 一九六二年
- 「中印国境問題」 英修道博士還暦記念論文集『外交史及び国際政治の諸問題』(慶應通信) 一九六二年
- 「中印国境紛争真因」 経済往来 一五卷(通卷二五卷) 一九六三年
- 「中国・ビルマ国境問題」 中国政治経済綜覧 昭和三九年度版 一九六四年
- 「中国とネパール・パキスタンとの国境問題」 中国政治経済綜覧 昭和三九年度版 一九六四年
- 「アジア・アフリカ・ブロックと国際連合―その投票行動の研究」 法学研究 三七卷七号 一九六四年
- 「東南アジアにおける貧困と政治」 民主社会主義研究 五七号 一九六四年
- 「国連における日本の投票態度―各ブロックとの同調度の統計から」 国際政治 二四号 一九六四年
- 「国連におけるブロック・ヴォーティング―A A 諸国を除く各ブロックの研究」 国連論叢 三月 一九六五年
- 「ラオス政治史と中国の外交政策―中立主義の苦悩 (一)」 法学研究 三九卷七号 一九六六年
- 「ラオス政治史と中国の外交政策―中立主義の苦悩 (二・完)」 法学研究 三九卷八号 一九六六年
- 「アメリカからみたヨーロッパ」 国際問題 八三号 一九六七年
- 「軍部の政治への介入―タイ、ビルマ、パキスタンにおける軍部の比較研究」 国際問題 八三号 一九六七年
- 「ある新独立国における国民の忠誠 (翻訳)」 慶應義塾大学地域研究グループ(編)『変革期における軍部と軍隊』(慶應通信) 一九六八年
- 「デービッド・E・アプター」(編) 慶應義塾大学地域研究グループ(訳)『イデオロギーと現代政治』(慶應通信) 一九六八年
- 「中国と東南アジア諸国―ヴェトナム、ラオス、ビルマの国境問題―」 法学研究 四一卷五号 一九六八年
- 「A A 世論に背を向ける」 朝日ジャーナル(特別増刊号) 一〇巻二四号 一九六八年
- 「東南アジアの人種問題」 国際問題 一〇一号 一九六八年

- 「国際機構論」関係英文文献目録
 「日本における東南アジア研究」
 「パキスタン軍部とネーション・ビルディング」
 「中国の東南アジア政策―中ソ論争以後」
- 山本登（編）『中ソ対立とアジア諸国（上）』（国際問題研究所）一九六九年
 国際法外交雑誌 六八巻四号 一九六九年
 法学研究 四三巻二号 一九七〇年
 三色旗 二七二号 一九七〇年
- 「中国の東南アジアに対する政策」
 「アメリカの東南アジア政策―一九五四年ジュネーブ会議をめぐって」
 「東南アジアをめぐる国際関係」
 「東南アジア諸国の中国観とその政策―国連における中国代表権問題との関連において」
- 法学研究 四三巻一〇号 一九七〇年
 国際時評 八月号 一九七〇年
 中国総覧 一九七一年版 一九七一年
 法学研究 四四巻三号 一九七一年
 国際問題 一三二号 一九七一年
- 「中国のインドシナ政策」
 「国連代表権問題」
 「中国の北ベトナムにたいする政策」 山本登（編）『中ソ対立とアジア諸国（下）』（国際問題研究所）一九七一年
 「中国と北ベトナム―信頼と警戒の錯綜」
 「国際連合と中小国家」
- 「アメリカの東南アジア政策―その形成過程の研究」
 慶應義塾大学地域研究グループ（編）『アメリカの対外政策』（鹿島研究所出版会）一九七一年
 「発展途上国とナショナルリズム―日本の新しい国家目標を求めて」 自動車とその世界 五九号 一九七一年
 「インドシナの政治・外交関係文献目録」 法学研究 四五巻八号 一九七二年
 「米中の谷間にゆれるビルマ共産党」 アジア 六五巻 一九七二年
 「激動する中国外交と日本」 アジア・クォーターリー 四巻四号 一九七二年

- 「中国とインドシナ」 アジア・クォーターリー 五卷二・三号 一九七三年
 「対アジア共産諸国関係」 中国総覧 一九七三年版 一九七三年
 “Japanese Politics: An Inside View”
 Itoh (ed.), *Japan's Voting Behavior in the U.N.*, Ithaca: Cornell University Press 1973
- 「十全大会と中国外交」 国際問題 一六九号 一九七四年
 「インドシナ三国・南アジア諸国」 中国総覧 一九七四年版 一九七四年
 「文革後中国の東南アジア政策」 アジア経済 一五卷一・一五卷二号 一九七四年
 「昭和初期における日本の中国観」
 アジア政経学会(編)『日中関係の相互イメージ—昭和初期を中心として』(現代中国研究叢書X) 一九七五年
 「対インドシナ諸国関係」 中国総覧 一九七五年版 一九七五年
 「ASEANにおける統合の期待と限界」 アジア 九五号 一九七五年
 「インドシナ半島展望」 国際時評 一一七号 一九七五年
 「ソ連外交における東南アジア」 アジア時報 五九号 一九七五年
 「多極化世界と日本—NHK大学講座 政治学2」 日本放送出版協会 一九七五年
 「東南アジアの新情勢」 世界経済 三〇巻八号 一九七五年
 「中国と東南アジア諸国—中国外交の理論と実践」
 入江啓四郎・安藤正士(共編)『現代中国の国際関係』(日本国際問題研究所) 一九七五年
 「第三世界の台頭と世界情勢の変化」 大学と理想 一四号 一九七六年
 「第三世界をめぐる国際環境—アジアを中心に」 武者小路公秀・蠟山道雄(共編)『国際政治学—多極化世界と日本』(有信堂高文社) 一九七六年
 「アジアの国際社会」 内田満・内山秀夫(共編)『政治学を学ぶ』(有斐閣) 一九七六年

- 「ASEANの研究―その発展過程と国勢の分析（共著）」 法学研究 四九卷六号 一九七六年
 - 「アジアから見たアメリカ―アメリカのアジア政策批判」 本間長世（編）『アメリカと世界』（研究社） 一九七六年
 - 「強権政治下の東南アジア」 アジアクォーターリー 九卷一―号 一九七七年
 - 「東南アジア諸国と日本」 三田評論 七七〇号 一九七七年
 - 「中国の東南アジア政策―反ソ・第三世界外交の展開」 日中経済協会（編）『中国とその近隣諸国をめぐる国際経済関係』 一九七七年
 - 「バリ首脳会議以後のASEAN諸国と日本」 アジア時報 八七号 一九七七年
 - 「ASEANの歴史およびその機構」 岡部達味（編）『ASEANをめぐる国際関係』（日本国際問題研究所） 一九七七年
 - 「東南アジア・南アジア・オセアニア（中国の対外関係）」 中国総覧 一九七七年版 一九七七年
 - 「ASEANの地域的安全保障と中立化構想」 国際問題 二一三号 一九七七年
 - 「対東南アジア・南アジア（含オセアニア）関係」 中国総覧 一九七八年版 一九七八年
 - 「ASEAN統合の現状と展望―国連における投票行動の分析」 法学研究 五一卷四号 一九七八年
 - 「中ソ対立と東南アジア」 アジア時報 一〇六号 一九七九年
 - 「カンボジア政変をめぐる東南アジア情勢」 東亜 一四一―号 一九七九年
 - 「雁行型近代化路線のベトナム」 アジア 一三七号 一九七九年
 - 「対東南アジア・南アジア」 中国総覧 一九八〇年版 一九八〇年
 - 「八〇年代東南アジアの動向と日本」 国際問題 二三八号 一九八〇年
 - 「新冷戦下のインドシナ―軍事より政治的解決の道を」 東亜 一五九号 一九八〇年
 - 「インドシナをめぐる米中ソ関係」 アジア時報 一二七号 一九八〇年
- “The Dimensionality of ASEAN Integration: The Voting Behavior of ASEAN Countries in the United

Nations, 1967-1976”

with In-Young Fun, *Keio Journal of Politics* No. 3 1980

「東南アジアにおけるソ連外交」

アジア時報 一三九号 一九八一年

「マレーシア外交と中国」

石川忠雄教授還暦記念論文集『現代中国と世界—その政治的展開—(慶應通信) 一九八二年

「マラッカ海峡をめぐる諸問題」

法学研究 内山正熊教授退職記念論文集 五六卷三号 一九八三年

「中ソ接近と東南アジア」

アジア時報 一五五号 一九八三年

「ASEAN 諸国の期待と反応—中曽根首相の ASEAN 歴訪をめぐる—」

花井等(編)『世界の目から見た政治大国日本』(地球社) 一九八四年

「カンボジア問題をめぐる最近の動向」

アジア時報 一七六号 一九八四年

「東南アジア・南アジア」

小田英郎(編)『比較政治Ⅱ—第三世界の政治—(放送大学教育振興会) 一九八五年

「マルコス王朝の没落」

アジア時報 一九二号 一九八六年

「マルコス王朝の崩壊と日本」

三田評論 八七〇号 一九八六年

「アジア・アフリカ諸国と日本—創立二〇周年を迎える ASEAN と日本—」

三田評論 八八四号 一九八七年

「第二「一〇年期」における日本と ASEAN」

岡部達味(編)『ASEAN の二〇年—その持続と発展—(日本国際問題研究所) 一九八七年

“Japan and ASEAN in the Second Decade”

T. Okabe (ed.), *Twenty Years of ASEAN*, Tokyo: Japan Institute of International Affairs 1988

「ASEAN—地域主義の可能性」

木戸翁(他編)『講座国際政治3—現代世界の分離と統合—(東京大学出版会) 一九八九年

「東南アジア(1)、(2)、南アジア」

小田英郎(編)『第三世界の政治—比較地域政治論—(放送大学教育振興会) 一九九〇年

- 「東アジア比較地域研究―北朝鮮・ベトナム」 学術月報 四四卷三号（通巻第五五五号） 一九九一年
- 「ASEAN関係資料（一）一九七六年第九回閣僚会議」一九八七年第三回首脳会議」 法学研究 六四卷五号 一九九一年
- 「ASEAN関係資料（二）一九七六年第九回閣僚会議」一九八七年第三回首脳会議」 法学研究 六四卷六号 一九九一年
- 「ASEAN関係資料（三）一九七六年第九回閣僚会議」一九八七年第三回首脳会議」 法学研究 六四卷七号 一九九一年
- 「転機に立つベトナムの政治と経済―北朝鮮との比較において」 慶應義塾大学地域研究センター編『アジア・太平洋新秩序の模索』（慶應通信） 一九九四年
- 「戦後五〇年を回顧して」 防衛学研究 一三三号 一九九五年
- 「変わる東アジア―実を結ぶか、壮大な地域協力形式の試み」 三田評論 九七四号 一九九五年
- 「東南アジア諸国から見た中国」 防衛学研究 一六号 一九九六年
- 「防衛学研究発表会25周年にあたって（防衛学研究発表会25周年記念号(1)）」 防衛学研究 一八号 一九九七年
- 「防大教育と留学生」 アジア時報 二九卷六号 一九九八年
- 「二十一世紀初頭の東アジアの国際環境」 デイフェンス 二一巻一号 二〇〇二年
- 「SFC政策研究支援機構」 三田評論 一〇四八号 二〇〇二年
- 「国際政治―統治と共生の模索」 唐木因和・後藤一美・金子芳樹・山本信人編『現代アジアの統治と共生』（慶應義塾大学出版会） 二〇〇二年
- 「アジア政経学会50周年を祝う―初心忘るべからず（「アジア政経学会」50周年記念講演）」 アジア研究 五〇巻一号 二〇〇四年
- 「防衛大学校五十年史」を讀んで―防衛大学校における士官教育」 防衛学研究 三二号 二〇〇四年

「追悼 塾長時代の石川先生（追悼 石川忠雄君）」

三田評論 一一〇九号 二〇〇八年

※なお辞典・年報等への寄稿、座談会、書評、随想等、および学術研究関係以外の論文などが数多くあるが、それらについては掲載を省略した。